

コナン・ドイル『マラコット 深海』のメモ

takaidos

コナン・ドイル
1929年発行。

大西尹明・訳。
1963年。

海底8千メートルのところに沈んだアトランティスがあったという話。
アトランティス人といっしょに潜水服を来て深海を探検するが、今日分かっているとおり、水圧で人体はもたない。

6章までは科学冒険もの。
7章から幻想ダークファンタジー。

ドイルの語りはやはり面白い。
ご都合主義のところもある。

★★★

<目次>

1. 消息を消したストラットフォード号/サイアラスからの瓶詰めの手紙/潜降函
2. 巨大ザリガニ出現/マラコット深淵へ/深海に棲む人間たちとの遭遇・救助される
3. 深海人の住処/思考投影スクリーンに経緯を投影/二つの神殿
4. 深海探検と遺跡の様子/アトランティス人たちの歴史投影
5. ストラットフォード号の沈没/ラジオ受信/瓶詰めの手紙/再び海上へ
6. 海底での冒険談/マンダの思考投影スクリーン/バアル教と混血児
7. 黒豹の邪神/対決

<登場人物>

マラコット博士:生物学専攻の老学者。
サイアラス・ヘッドリー:アメリカ人。動物学者。マラコット博士といっしょに深海に潜り手記を残した。
ビル・スキャンラン:アメリカ人。潜降函を造ったメリバンク製鋼所の職工。同じく潜降函に乗った。
ハウイ船長:ストラットフォード号の船長。
タルボット卿:サイアラス・ヘッドリーの友人。オックスフォード大の学者。サイアラスから事前に手紙を受け取った。

ブロヴ:マラコット博士のライバル。ドイツのギーセンの学者。海の深度と水圧の関係についてのマラコット博士の理論に反駁した。

マンダ:深海でマラコット博士らを救った。アトランティスの末裔で族長。

モウナ:マンダの若い娘。

バーブリックス:アトランティス人。機械の監督。

バアル・シーバ:黒貌の邪神。不死。かつてアトランティスを治め、地上では様々歴史上の惨事を起こした。テレパシー、瞬間移動。サイコキネシス。

ウォーダ:アトランティスの賢人にして能力者。地上では意識体。

マラックス:潜降函の綱を切ったザリガニ型の怪物。

ブランケット・フィッシュ:体表がネバネバした巨大生物。

プラクサ:緑色の怪物。半有機体、半気体性。

クリックスコック:大型電気ナメクジ。樽のような身体つき。

ハイドロプス黒小鰭:ピラニアのような肉食魚。

<あらすじ>

1926年ストラットフォード号から深海の淵に向かって降ろされた潜降函はマラコット博士、サイアラス・ヘッドリー、ビル・スキャンランの3名とともに消息を絶った。

潜降函は深海で巨大なザリガニ型怪物に襲われて、綱を切られて、7500メートル以上下の海底に落ちてしまう。8140メートル？そこへ深海に棲む人間たちが現れてマラコット博士ら3人を助けてくれる。

彼らの透明の潜水服と箱(酸素ボンベと排気箱)を装着してもらい、3人は彼らの住処に案内される。

彼らは好意的だった。

族長はマンダと名乗り、人の心を投影できるテレパシー・スクリーンを持って来たので、マラコットはテムズ川からストラットフォード号が出港するシーンから再現して見せる。

一行は深海人たちに同情される。

地下の化学工場施設に案内される。

この住処はどうやら元々地上にあり、海底に沈む前から準備されていたようだった。

案内されない部屋に忍び込むと、そこにはモロック(子供を人身御供にして祭ったセム族の神)があった。別名バアル神。フェニキア人の昔の神だった。

しかし一行は僧侶たちにそこを追い出される。

もう一つの区域には象牙彫の、手には槍を持ち肩にフクロウをとまらせている婦人の像があった。
女神アテナだった。

マンダたち6人はマラコット博士ら3人を連れて海底の散歩に出る。
石炭の採石場があり働かされている人たちもいた。
海底都市ではアトランティス人が上層社会、ギリシャ人が奴隷で下層社会だった。
海底の平原から都市の遺跡に降りる。

テレパシースクリーンでアトランティス大陸の繁栄、戦争と退廃、沈んで行く様子を見せてもらう。
マラコット博士は代々の王の墓の数からアトランティスは栄華を極めてからすでに8千年は経過していて、エジプトが文書残した歴史より古い、さらにこれほどの都市を造るのにそれ以前に数千年を要したはずだと推論する。

一行は少しずつアトランティスの言葉を覚える。
深海には未知のいろいろな生物がいて一冊の本が書けるほどだ。
一度はモウナとサイアラスがいっしょにいたそばを太さ3メートル、長さ60メートル以上のウミヘビ2匹が通過したこともあった。
ある日騒ぎが起こり、みんなといっしょに見に行くと、ストラットフォード号が沈んでいた。
一行を降ろしたあと台風で沈み、船内にはハウイ船長と3人の船員の遺体もあった。
アトランティス人は船を解体して住処に持ち込んだ。
スキャンランがラジオ受信機を組み立て、みんなの前で披露した。

マラコット博士が瓶詰め手紙を海の上に送ってみようと言い出し、スキャンランがそれなら自分たちもそれで海上に戻ろうという。

サイアラスはタルボットへの手紙を海上へあげる。
その手紙を連合通信社の特派員ケイ・オズボーン氏がスクープしファヴァジャー氏が大型ヨット・マリオン号による救助を申し出、オズボーンと映画カメラマンを乗せてヘッドリー氏の指定した地点に向かったのだった。
そして再び3人からの手紙が浮かび、場所を示す2つの球体が浮かんだあと、モウナと3人が浮かんで来て救出されたのだった。

サイアラスによる海底冒険談の話。
巨大な緑色の怪物プラクサを追いつめた話。
マンダが投影して見せた過去のアトランティスの記憶の中に、マンダとモウナと自分がいて、自分はアトランティスが沈む前に殺され

、マンダとモウナはアトランティスといっしょに海底に沈んでいたのだった。
スキャンランとバーブリックスがギリシャ人女と混血の赤ん坊を連れて逃げて来た。
バアル教の僧侶が支配層・被支配層の区別を厳格に守るために赤ん坊を殺そうとしていたのだった。
マンダとモウナも現れて赤ん坊は救われる。

一行はアトランティス人たちに内緒で黒い神殿に入る。
するとそこには潜水服もなしで2メートルの高さの男バアル・シーバがいた。
彼は一行のガラス球の中に直接話しかけて来る。
不死で超能力を持つこの男こそ『黒貌の邪神』と呼ばれた悪魔だった。
バアルは一行にアトランティス人たち手紙を渡すように頼まれる。
教授は書斎でバアルを倒す手を考える。
神殿で教授はバアルと向き合い、睨み合いで見事バアルを消し去る。
教授には賢人ウォーダが味方をしていたのだった。

<メモ>

1920～1933年はアメリカでは禁酒法の時代。

アトランティスではすでに核分裂反応を実現していた。
アトランティス文明の起源は12000年前。大都市を造って繁栄したが8000年前に水没。

実際の歴史。

1934年核分裂反応を予言(ドイツ女性化学者イダ・ノダック)。

1938年核分裂反応発見(オットー・ハーン)。

1938年自然界に存在する元素に中性子を当てると中性子が出来る(エンリコ・フェルミ)。

思想反射装置→『記憶投影スクリーン』とか『思考投影スクリーン』のが意識としていい。

エーテル:光、熱、電磁波の輻射現象の仮想的媒体。

ラジオ受信:深海で可能なのか?

レヴィゲン・ガス:水素の9分の1の重さ。

強梗症→強硬症:カタプレシー。

記憶投影スクリーンに映されたアトランティス文明。

「さてつぎには別の光景が映し出された。
ぼくらは戦争を見た。
たえまのない、陸上と海上との戦争を見た。
はだかで無防備の人種が、大きな古代戦車や鎖かたびらを着けた騎士の突進に、あるいは踏み潰され、あるいは踏みにじられるさまを見た。
勝利者には財宝が山のように積まれたが、富がしだいに増すにつれ、スクリーンに映るその顔はますます動物的に、いよいよ残忍になっていった。
その人々は時代がしだいに進むごとに、ますます墮落していった。
好色的な放蕩や道徳的な墮落の徴候、物資の増大と精神の衰微の徴候を見せられた。
ひとを犠牲にする残酷なスポーツが男らしい昔の運動にとって代わった。
平和で素朴な家庭生活も、精神的教養も、鳴りを潜め、次から次へと仕事を変えて絶えず快楽を求め、ために絶えずそれを見失いながら、何かもっと手の込んだ不自然な方式によればまだそれが見つかるかもしれぬといつも思い込んでいる落ち着きのない、浅薄な人々の姿をぼくらはちらりと見た。
一方には、ただ感覚的な満足を求める過度の富裕階級があり、またもう一方には、主人の欲望がたとえどんなに悪かろうと、その欲望を満足させることに仕えるのだけがその勤めであるという過度の貧困階級があるにすぎなかった。

。。。
国家を間違った道から立ち返らせようとする改革者が現れ、民衆訴えたが、つぎには救いを垂れようとした当の相手から、その人々が軽蔑され嘲笑される光景が現れるばかりだった。
改革者に反対音頭をとっているのは、バアルの神に仕える僧侶たちで、この僧侶たちこそ、形式、見せかけ、仰々しい儀式をのさばらせ、しだいに昔の没我的な精神の発展を駆使しようとしている張本人なのであった」
→バアル教団は支配層と被支配層を分けたままにしようとしていた。

そのためには両者の混血児も殺して来た。